妹はふろうふし

道化童子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

妹はふるつふし

【Nコード】

N3213BA

【作者名】

道化童子

【あらすじ】

高校二年生の風楼拓海は、ある日家に帰ると父にいきなり妹を紹介された。

妹の名前は風楼伏。

義理でも片親違いでもなく、父と母の娘で、戸籍上もきちんと登録されている妹だと説明される。

突きつけられた現状を受け入れざるを得ないが、いきなり年頃になって紹介された妹はただの他人の女の子であり、そんな子といきなり同じ家に住むことになり緊張していた。

だが、妹の方は妹として振る舞い、しかも彼のベッドに潜り込んで来たりもする無邪気な女の子だった。

P i x i v 小説にも投稿中

第一節（前書き）

この小説は年齢制限はありませんが、エロとまではいきませんがえつちな表現がふんだんに盛り込まれていますので、ご注意ください。

第一節

幕間 研究者が降り立つ街

ここは地方の一都市。

いや、都市と呼べるほどの規模でもないだろう。

だが、この辺りでは中核となる街であるため人の通りも多く、電車も数多く通っている。

その中でも最も大きく、市の中心街に位置する駅。

そこは様々な人が行き交い、混み合っている。

駅の改札は電車が来るたび多くの人々を吐き出している。

そんな改札が、人ごみの合間に彼らを吐き出した。

「なんか、普通の街ね、ここ。田舎でもなければ、都会でもない。一番つまらない街よね」

立ち止り、腰に手を付きながら、開口一番悪態をつくのは、ゴシツクロリータの服がよく似合う小柄な少女。

生意気そうな瞳がつまらなそうに駅周辺を眺め、そのたびにツインテールがゆらゆら揺れる。

キャスターつき旅行バッグを持って歩いている姿は、大都市の特定の場所へ行けばよく見られる光景だが、この辺りでは珍しく、行き交う人々も、彼女を振り返る。

中学の半ばくらいの容姿の、ゴスロリスタイルで反抗期丸出しの態度は、あるいは大人から見れば微笑ましくも見えるかもしれない。だが、実際にはその周囲の人間からは、ただ面倒に感じることにしろ。

「自分から来ておいて何言ってるんですか、こんな何も無い街に。僕としてはさっさと帰って研究でもして欲しいものですけど」

ため息混じりに少女の言葉に答えるのは、彼女の隣を歩く男性。

いや、まだ少年と言ってもいい年齢だろう。

長めの髪が似合う美形だが、あまり表情を見せず、飄々としたところがあり、少女の我儘も聞き流して平然としていられるタイプである。

ある意味少女の天敵でもあり、周囲から見ればお似合いでもあると言える。

細身の身体に細身の黒いスーツがよく似合う。

理知的な表情には、大人の良識と子供の悪戯っばさが中途半端に同居していた。

「うるさいわね、樋田！ これも研究だって言ってるでしょうが！」

「所長の研究は研究室で十分出来るはずです。お得意のアンチエイジングの観点から」

「だから、うるさい！ あんなのいくらやって精度が良くなっても限界があるって言ってるでしょうが！」

所長と呼ばれる少女と、部下と思われる樋田と呼ばれる少年。

端から見れば恋人の喧嘩、しかも少女の我儘を少年が流しているようにしか思えないが、彼らはれっきとした社会人である。

しかも、高度な研究者なのだ。

少女の名は水上結衣。

十歳でアメリカの大学に入学し、十四歳で博士ドクターの称号を得た天才少女だ。

その後日本に戻り、化粧品会社で画期的なアンチエイジング化粧品を開発し、大ヒットさせる。

それにより会社から億単位の報奨金を得て独立し、不老不死研究所を立ち上げた。

その研究所は主に、アンチエイジングの薬品や化粧品を開発し、企業に売る事で利益を得ているが、彼女が本当に研究がしたかったのは不老不死なのだ。

財力を得た彼女は、それを不老不死の研究につき込み、足りなくなればアンチエイジングで稼ぐ、というやり方でここまでやってきた。

見た目中学生に見える彼女は、こう見えて今年で十七歳である。アンチエイジングや不老不死の研究の一定の成果で、多少年齢を重ねずにいられたのだ。

だが、それはただ単に経年を遅らせる事しか出来ない。

彼女の求める本当の不老不死は、永遠の命なのだ。

「あんたも経営の事なんて考えなくてもいいから、研究の手伝いくらいしなさいよ！ 何のためにあんた雇ってると思ってるのよ！」

「所長の尻拭いですか？」

「違うわっ！」

「ですが、僕はアンチエイジング以外、大抵所長の尻拭いしかやってませんよ？」

樋田は相変わらずの無表情で、上司であるはずの結衣に平然と言い返す。

「うるさい！」

「はいはい、やれやれ。よっ、と」

樋田は重そうに荷物を持ち上げる。

彼の名は樋田信人。

彼女と同じ大学をこの歳で卒業している、同じく天才でもある。

十六歳にして修士^{マスター}、という彼女に比べれば多少見劣りする経歴だが、天才である事には変わりはない。

彼は修士^{マスター}を卒業し、博士^{ドクター}への進級がほぼ決まっていた去年に、ちょうどその頃独立した結衣が大学へと乗り込んできて、うちに来いと直接スカウトしたのだ。

結衣は自分の後輩に日本人で自分と同じ分野の研究をしている天才がいる、ということでもスカウトし、樋田の方は既に大学では結衣のことは伝説になっていたため、その伝説の人のところへ勤けると思い、博士^{ドクター}への進級をやめ、研究所へと来たのだ。

二人とも研究所立ち上げ当時十六歳で、今は十七歳。

その歳で結衣と樋田の研究は大いに成功し、研究所は巨万の利益を得た。

だが、その富は、結衣の一言により、不老不死などという途方もない研究へと費やされる事になった。

更に言えば、結衣の天才研究者とも、十七歳とも思えない容姿と態度。

最初は結衣を尊敬していた樋田も、徐々にそんな意識も削がれて行き、こんな態度を取るようになったのだ。

「で、何でここに来たんですか？ 一応理由くらい聞いておきましようか」

「だから何度も言ってるでしょうが！ この町に不老不死伝説があるからよ！」

「所長、観光は自費でやってください」

「だーかーらー！ー！」

今にも爆発しそうな結衣。

慣れているので気も使わない樋田。

「ここに！ 不老不死の！ ヒントが！ あるかも知れないって！ 言ってるでしょうが！」

「所長、駅前で変な事叫ばないでください」

「うわーん！」

ついには泣き出す結衣。

一見中学生に見えるゴスロリの泣き顔は微笑ましくもある。

樋田はこうしていつも溜飲を下げるのだ。

「分かりました、そろそろ聞いてあげましょう。さあ、言ってみてください」

「うん、あのね……」

泣いて子供のようになつた結衣がおずおずと話し始める。

「あ、長くなりそうなら食事しながらにしましょう。何かおごってください。イタリアンがいいです」

「きけー！ー！」

結衣の怒鳴り声は街へと消えていった。

「でね、この町には、人知れない不老不死伝説があるのよ」

ミートソースを口の周りにつけながら、結衣が言う。

「そんなものは全国にいくらでもあって、これまでも回って、全部眉唾だったじゃないですか」

ペペロンチーノを上品に食べる樋田が答える。

「そう、ここまで回ってきた不老不死伝説は大抵嘘や、情報ネットワークが発達していない時代の噂だったわね」

「ま、不老不死なんてそんなもんですよ。峠の茶屋に親父がいる。旅人がそこで茶を飲んで、三十年後にまた行くと同じように親父がいる。そのときに一緒に連れて行った子供が成長し、更に三十年後にまた行ったら、それでも同じ親父がいる。ああ、あの茶屋の親父は不老不死だ、なんていう」

「そうね、それは代替わりしてることに気がつかない人間の勘違いに過ぎないわ。後は三百年生きた高僧、なんてのも、ただ単に死んだ事を教えられてない周囲の村の人たちが何百年も高僧の存在を言い伝えて来たっただけで」

「で、どこに行ってもそれを観光に利用してるだけ。本当に不老不死があるなら、今も本人が生きているはずで、それがいないのに不老不死の里もないもんです」

樋田がやれやれ、と首を振る。

「でもね、ここは見ても分かる通り、普通の町よ。観光にも利用していないし、不老不死の里ってことも誰も知らない。なんだか、逆に怪しくない？ 本当に不老不死の人がいて、それを隠しているんじゃないかしら？」

「僕は所長を研究所に隠しておきたいですけどね」

「またあんたは！ 何でそう非協力的なのよ！」

食べ終わった結衣は、フォークを樋田に向けて怒る。

「アンチエイジングに関する研究なら、いくらでも協力しますよ」

樋田はナプキンで結衣の口の周りを拭ってやる。

「僕は不老不死なんてものの研究に、人生を無駄に使いたくないの

です。老病死が待ち受ける人間として、僕はアンチエイジングを研究してたいのです」

「帰ったらやるわよ！ここにしばらく滞在して、また帰ったらしばらくそっちの研究するから！」

「分かりましたよ。じゃ、まず何をすればいいんでしょうかね？」

「とりあえずは、市の歴史が分かる施設や市役所に行つて調査しましょう」

「はいはい、分かりました」

樋田は面倒くさそうな表情で食後のコーヒーを飲む。

「っ！？」

エスプレッソを頼んだはずなのだが、甘ったるいミルクティーが来ていて、味の違和感で驚く。

「ヴアー！」

目の前にはミルクティーと思つてエスプレッソを飲んだ結衣の泣き顔があつた。

「いや、そっちはさすがに色で分かるでしょう」

呆れながらも、樋田はナプキンを手に取つた。

妹がふるつふし

親父の一言に、俺はしばらく何の反応もできなかった。

無理もない、いきなり衝撃的なことを言われれば大抵はこうなるんじゃないかと思う。

俺は自分の家の居間の前に、鞆すらまだ持つたまま立っていた。

帰ってきて、親父に呼ばれた。

ああ、ここまでは何の不思議もない。

昼間になんて親父がいるのかと言えば、ニートだからだが、そんなことは今どうでもいい。

そこに入ってみると、親父と母さんと、後、見たこともない女の子が、こつちを見て笑っていた。

女の子は幼さも多分に残した表情をしているが、俺と大して歳は違わないだろう。

肩のあたりで切りそろえられた髪は、この子を人形のように綺麗に見せていた。

大きめの目がにこり、とこちらに笑いかける。

あ、可愛い。

そう思った瞬間だった。

「この子はお前の妹だ」

親父の言った一言に、俺は固まってしまったのだ。

真っ白になり、再起動して立ち上がるまで、およそ一分くらいの時間がかかった。

まず、何から確認しようか。

俺は風楼拓海、風楼家の子供で、一人っ子だ。

近所の公立高校に通う二年生で、成績は、まあ普通だ。

俺にはニートの親父と専業主婦の母さんしか家族はおらず、三人でまあ、喧嘩をしないわけでもないが仲良く暮らしている。

もちろんこれまで妹なんかいたことはないし、これからもいることはないだろう。

そう思っていた俺の知識に、思いがけない情報が降りかかってきた。

「えっと……」

俺はようやく、口を開いた。

「どっちの浮気？」

俺は二人を交互に指さしながら尋ねた。

「何言ってるんだ、お父さんとお母さんが浮気なんてするわけないだろ？ ずっと家にいるのに」

「そうよ、近所でも冬眠中の熊のような夫婦って有名なんだから」

「それ、褒め言葉じゃないから。ていうか、そろそろ働けよ。俺が

生まれて以来働いてないだろ……って、今はそれはどうでもいい。
あ、じゃあ養子か何かか？」

浮気して出来た子が、もう一人の親が死んで訪ねてきたってわけでもないなら、養子しかないんだろうな。

「違う。父さんと母さんが十六年前に愛し合って、十五年前に生まれた子だ」

親父が真剣な顔で言う。

親父は嘘、大げさ、紛らわしい事が大好きだが、この真剣な表情は本物だろう。

「……詳しく話してくれ」

「うむ……お前が生まれてすぐのある日、母さんがどこからか、ナース服を手に入れてきてな、それを着た母さんを見ていたら、私もムラムラとして」

「プレイの内容なんてどうでもいい！ この子が妹って言うんなら、今までどこにいて、何でここにいなかったんだよ！ あと、母さんも頬赤らめるな！」

息子にリアルな性を話すことはもう珍しくもなんともないのだが、まじめに話している時に言われるとイライラする。

「ふむ、やっぱり話さなければならぬか……」

親父が腕を組んで真剣な顔をする。

「この子は生まれつき身体が弱くてな。フランスの医療機関ですつと治療をしていたんだ。最近になってやっと治療法が見つかり、完治したので帰国したんだ。いつ死ぬか分からなかったから、お前に余計な精神的負担をかけたくなかったので、黙っていた。すまなかつたな」

親父は暗記していたかのように、一気に言葉を紡ぐ。

怪しい。

そのいいわけは怪しすぎる。

「なあ、あんた」

俺は妹と称する女の子に聞いてみることにする。

「なあに、お兄ちゃん？」

につこり笑って少し首を傾げる表情がとても可愛くて、俺の中で「この子はもしかすると本当に妹かもしれない」という歯止めがなくなれば、この瞬間に恋に落ちていたかもしれない。

「あ、えつと……ちよつと、フランス語を喋ってくれないか？」

俺は目をそらしながらも、そんなことを言った。

「いいよ。イカノテジュボーン」

その子は、流暢な、おそらくフランス語で何かを言った。

「ナガジュバーン」
ん？

ナガジュバーン……長襦袢？

いやいや、たまたま日本語っぽく聞こえるフランス語だろう。

その前の方は日本語には聞こえ……。

イカの手十本？

「ポンジユース？」

「ダウト！ 心の太陽ダウト！ フランスと愛媛に謝れ！」

何のことはない、日本語をフランス語っぽく発音してただけだ。

一瞬でもだまされた自分が恥ずかしい。

「ばれちゃった」

てへ、って感じで可愛く微笑む女の子。

「どうしてそんな嘘をついた！」

俺は親父の胸ぐらをつかんだ。

「待って、お兄ちゃん！」

女の子が、俺の腕をつかんで止める。

「ちよつと後にしてくれ、あと、お兄ちゃんとか呼ぶな！」

「だっってお兄ちゃんだもん！」

強く俺の腕をつかむその子に、強い口調でそう言われると、俺も少しは手を緩めてしまう。

その隙に親父は逃げる。

俺は追うことはなかった。

だから、女の子も俺の腕を離す。

「お父さんの言った事はほとんどデタラメだけど、私の身体が弱くって、学校に行けずに治療してたのは本当なんだよ」

「……いや、元気そうじゃん……」

俺の腕をつかんだ力は、少なくとも病人のそれじゃなかった。

「だから！ 元気になったの！」

強い主張、いや、若干怒り気味の口調で半ば怒鳴る女の子。

そう言われると、嘘か本当かはともかく、これ以上の反論もできない。

ただ幼くて可愛い女の子に見えたが、実際はちゃんと芯があつて、強く物も言える子のようにだ。

俺の目を見て離さない。

信じて欲しいとその目が訴えている。

「いや、まあ、信用してないってわけじゃないんだけどさ……」

ここまでする以上、本当のことか、とんでもない悪女の素質を持った子かのどちらかだが、そもそも俺の疑問には一切答えてはいないので、俺のわだかまりは解けることはない。

「私は、フランスなんかには行ってないよ？ ずっと、この家で治療に専念してたんだよ」

訴えるような目でまっすぐ見つめられてそう言う。

こんな可愛い女の子に、結構近い距離からそう言われると信じられないのだが、それにしてもまずは俺のわだかまりを解いてからだ。

「いや、信じたいのは山々だけどさ、俺もこの家に生まれた時から住んでるんだよ。でも、一度も会ったことがないだろ？」

この子を信じたいと思っても、その事実を変えようがない。

ここにいた、とこの子が主張するが、いくらなんでも十数年間、俺と一度も会わなかったなんてことはないだろう。

「それは、お兄ちゃんからずっと隠れて生活してたから仕方がないよ。昼は出てきたりしてたんだけど」

「いや、それにしても、この家に隠れるところなんてどこにも……」
言いかけて俺は一つの事実を思い出した。

「もしかして、あかずの間か……？」

俺はおそるおそる聞いてみた。

「へえ、お兄ちゃんはあかずの間って呼んでるんだ。うん、そうだよ。お兄ちゃんの部屋の隣だよ？」

その子は、あっけらかんとそう言って笑った。

あかずの間ってというのは、俺の部屋の隣にある部屋のことだ。

小さいころに、そこにおばけが出ると言われて入らなくなった部屋で、しかもそこから物音も聞こえてきたので、子供の頃は本当に怖かった。

だが、その気配も物音も、いつの間にか慣れ、今では特に気にすることはなくなっただが、確かに今でも気配はしていた。

だが、特に疑問に思うことはなく、今までそこに入ったことはなかった。

まさかその向こうでこの子がこれまでずっと住んでいて、今も住んでるって言うのか？

いやいや、さすがにそれはないだろう。

いくらなんでもそこまで隠す意味がない。

「私は特殊な病気だから、あまり人と会えなかったんだ」

俺の表情に疑惑を見た彼女が、そんなことを言う。

「でも、私はずっとお兄ちゃんの気配や物音を感じていたんだよ！
会えなかったけど、ずっと」

女の子は、大切な何かを抱きしめるように胸に手を当てる。

それが何かは分からなかったけど、俺は確かにこの子の気配を感じていた。

それと同じように、この子はそれを感じてたんだろう。

「お兄ちゃんは、いつも何かのトレーニングをしてるよね？」

「？ してないと思うけど？」

無邪気な表情でそう言われるが、俺には心当たりがなかった。

「でも、二十二時ごろ、毎日ものすごい勢いで何かをこすってるよね？ 息も荒くなるくらいだから、てつきり何かのトレーニングかと……」

「ストップ！ わかった！ 信じよう！ お前はこの家にいた！」
完全無防備だった俺は、この子に毎日それを聞かせてたのかと思うと、なんていうか、申し訳なくなってきた。

確かにそこまで知っているなら、あそこに住んでいたってのも事実だろう。

「だが、それが兄妹っていう証拠にはならないぞ。他人だっ一緒に住むこともあるだろう」

赤の他人の女の子にあれを聞かせてたかと思うと、是が非でも妹だと思ひ込んでいた方がいいんだろうけど、そこはやっぱり確認しておく方がいいだろう。

「お前はそう思うと思った。だから、こんなものを用意した」

親父がテーブルの上に乗せたのは、一枚の書類だ。
よくは分からないが、戸籍に関する書類らしい。

その家族の欄にはこう書かれていた。

世帯主 風楼勝徳ふうろうしょうとく

妻 祥陽しょうよう

長男 拓海

長女 伏

「……ふせ？」

「ふしって読むんだよ、お兄ちゃん」

また、妙な名前だな、と思ったが、目の前に本人がいるので黙っていた。

まあ、この親父が付けた名前だと考えるとこんなもんか。
ともかく、戸籍を見せられると信じるしかない。

これが親父の偽装ってこともないわけじゃないが、どっちにしろ、

この子がこれからもこの家に住むのは変わらない事実なんだろう。それなら妹にしておいた方がいい。

こんな可愛い子が妹じゃないと思うと、どうにかなってしまふ。

「これからはよろしくね、お兄ちゃん？」

腕を後ろに組み、少し首を傾げながら俺を見上げてにっこり笑う伏。

これだけ可愛い妹がいるのは、幸せでしかない。そう思うことにした。

「ああ、分かったよ、えっと、伏」

「うんっ」

俺が名前を呼ぶと、伏は嬉しそうにぴょん、と跳ねる。

サラサラの髪もふわりと跳ねる。

「で、お前の行ってる高校に転入届を出して、明日から通うことになった。面倒を見てやってくれ」

「ああ、分かった。まあ、一緒に高校まで送ってくくらいしか出来ないけどな」

「それでいいよ。私、頑張るから！」

何をだよ、と思ったが、そのあまりにも元気な様子を、俺は微笑ましく見ているだけだった。

第二節

時計は二十二時を回った。

風呂にも入ったし、いつもなら部屋の電気を消して、そろそろ寝る頃だ。

だが俺はどうしようかと迷っていることがあった。

それは、まあ、いつもの日課のことだ。

俺はベッドに入って寝る前に、いつも日課をこなしているんだが、これからはなかなかそれが出来ない。

隣に伏がいて、それが聞こえているからだ。

とはいえ、俺も健全な男子であり、我慢するということはありません。

だからどうしたもんかと悩んでいた。

ま、悩んでも仕方がない、出来るだけ静かにやるか。

俺はそう思いながら、電気を消して、ベッドに潜り込んだ。

さて、じゃあ、やるか、などと思っていた時のことだ。

かちやり

入り口のドアが、静かに開いた。

親父か誰かか、などと思って電気をつけようとしたとき。

「お兄ちゃん？ 起きてる？」

小さな伏の声が聞こえた。

「ふ、伏!？」

俺は慌てて飛び起きて、電気をつけようとする。

伏は入り口のドアを閉めると、そのまま俺にとびかかってきて、

俺はベッドの上に押し倒される。

「ぐっ……!」

風呂上がりのシャンプーの香りと、あとほんのりと伏自身の香り。

柔らかい、伏の身体が俺の胸にのしかかり、俺は全ての動作を停止せざるを得なくなった。

何？

何が起きてんの？

俺の疑問に答える者はいない。

唯一答えてくれそうな伏は、俺の胸に抱きついたまま、俺の耳元にこう言った。

「今日は一緒に寝よ？」

ああ、なんだ。

一緒に寝たかっただけか。

しょうがないな、それならちよっと布団を開けて　　って。

「そんなわけにいくかつ！」

俺は起き上がって伏をどかせる。

「でも、兄妹だよ？　兄妹って一緒に寝たりするものでしょ？」

何の迷いもなく、そんなことを言い出す伏。

なるほど、兄妹だったか。

それなら一緒に寝ても……いやいやいや！

「それは子供の頃の話だ！　高校生の兄妹の話じゃない！」

「でも、お父さんの持つてるゲームやアニメではみんな一緒に寝てるよ？」

あのクソ親父、娘に何てもんやらせてるんだ。

「それはギャルゲやアニメだからだ！」

全く、一般常識がないのかよ、こいつには

「…………だめ？」

ベッドの隅に寄り、上目遣いでこっちを見る伏。

そう言えば、一般常識も何も、普通の生活なんて今まで出来てなかったんだよな、この子。

俺の妹なのに、俺すらも会ったことがなくて、この歳まで普通の生活なんてしたことがなかったんだろうな。

そう考えると、一日くらい…………。

いやいやいや！

駄目だ駄目だ！

伏がいくら無邪気な妹でも、高校生バディを持った女の子であることには一ミリも変わりがないし！

この子がよくても、俺が困る。

隣に女の子が寝てたら俺が眠れない。

子供の頃から妹なら何とでもなるかもしれないが、成長してからいきなり妹と言われても、頭では納得しても、心までは納得していない。

可哀想だが、ここはお引取り願おう。

「なあ、伏。やつぱりさ」

「何、お兄ちゃん？」

声は、俺のすぐ隣の耳元から聞こえて来た。

「……え？」

振り向くと、そこには鼻をぶつけそうな位置に、伏の顔があった。「な、何だ！？」

伏は俺の許可もなく俺の布団に潜り込み、隣に寝ていたのだ。

俺はあまりの顔の近さに、のけぞってしまった。すると、ずい、とその分伏が攻め込んで来た。

「じゃ、おやすみ〜」

「ちよっと待て！」

俺は慌てて起き上がる。

「もう！ 早く寝ようよ！ 明日から学校なんだから！」

伏に叱られる。

ああ、そう言えば明日からだっとな、伏の学校生活。

初めてだし、期待もあるだろうが不安もあるだろうし、何しろ病気からの復帰だ。体力はあったほうがいいだろう。

「そうだな。悪い。じゃ、寝るか」

俺はもう一度横になり、布団をかけて目を閉じ……。

「ノウツ！」

危づく乗るところだった。

「とにかく！ 自分の部屋で寝ろ！ ほら！」

俺は伏を押し出そうと、手を伏に向けて押し込む。

むにゆう

「きゃあん！」

俺の手は、軽い弾力と共に、伏へと押し込まれた。

ちょうど俺の押し込んだ手は伏の胸に当たり、癖になりそうな柔らかな弾力が、俺の腕力にささやかな抵抗をした。

しかも伏はノンブラジャー！。

豊満とはとても言えず、どちらかと言うとやせていて胸もない伏だが、このささやかなふくらみが女の子である事を主張していた。

「お、お兄ちゃん……」

俺がその感触を呆然としつつも楽しんでいたら、伏が切なげな声を上げたので慌てて手を戻す。

「あ、ごめっ！ いやっ！ そのっ！」

妹の胸に手を押し付け、その柔らかさを楽しんでいた俺は、自己嫌悪では済まされないほどの衝撃を受けて混乱していた。

何より、さっきの心地いい感触が忘れられないでいる。

日課も済ませていない俺には、あまりにも刺激が強すぎた。

「？ どうしてもぞもぞしてるの、お兄ちゃん？」

「何でもないです！」

俺は元気なマイサンを抑えようと、必死にこれまでのことを忘却のかなたへと追いやろうとしていた。

「そうなの？ じゃ、そろそろ寝ようか？」

そう言うと、伏は体を俺に寄せ、腕をぎゅっと抱きしめてきた。

ささやかな胸が俺の二の腕のあたりに押し付けられている。

もちろんノンブラジャー！。

「いやっ！ おまつ！ ちよっ！」

俺は慌てるが、押せば伏の胸に腕を押し込む事になるし、引けばその分伏が攻め込んでくる。

どっちにしろ、俺のピンチには変わりはない。

俺は身動きが取れないまま、固まった。

「おやすみ、お兄ちゃん」

そんな嬉しそうな声が耳元から聞こえた。

身動きの取れない俺は、それにこう返すしかなかった。

「おやすみ」

目覚めは思ったほど悪くなかった。

うん、あんな状態で眠れるわけがないだろう、なんて思っていたけれど、以外にも早く眠ってしまった。

何ていうか、心地よかったと言ってもいい。

妹とはいえ、女の子の寝息を聞きながら眠りに落ちていくというのは悪くない。

悪くないどころか最高なのかも知れない。

こういうのはあと五年か十年してから体験するものだと思っていたが、こんなに早く経験してしまった。

俺の今後の人生に影響しなければいいんだがな。

ま、そんな事を考えながら目を開ける。

隣にはまだ寝息を立てている伏。

俺はそれをじっと見ていた。

こいつは本当に可愛いんだよな。

何だかんだで親父は人格的にはクズだが、顔は悪くないし、母さんも元々美人だったらしいから、まあ、遺伝子的にも悪くないんだろうけどさ。

それにしても可愛過ぎないか？

いや、まあ、自分の事を言うのは本当に気が引けるが、俺の顔も

親の遺伝子を引き継いで、そんなに悪くはない。

だが、こいつの顔はそういう、前から歩いてきて、お、可愛い、と思う程度じゃないんだよな。

何ていうか、振り返るほどの美少女って言えばいいんだろうか。そのレベルの顔なんだよな。

正直、妹でなければ、俺の理性は破壊されていたかも知れない。

おっと、妹の寝顔を覗き込んでニヤニヤしてる暇じゃない。

もう起きる時間だ。

「おい、伏、起きろ、時間だぞ？」

「ん……んにゃー……」

俺の揺さぶりに反応した伏は、それがうっとおしいとばかりに寝返りを打つ。

「そろそろ起きろ！ 学校に遅れるぞ？」

俺は更に強く揺さぶる。

「にゃああああ……」

伏はゆっくりと目を開く。

が、また閉じる。

女の子は大抵低血圧だと聞いてたがそれは本当なんだな。

「しょうがねえなあ」

俺は勢いよく布団をはがしてやる。

「どうだ、これで起き……」

俺の動作はそこで固まった。

伏のパジャマは乱れきっていて、何ていうか、胸とかパンツとか丸見え状態だったのだ。

え？

俺の隣で寝てたんだろ？

何でこんな状態になるの？

俺は伏の衣服を直そうか、いや、身体に触れたらどうしよう、な
どと思っっているうちに、伏の目が開いた。

伏の目が徐々に焦点を合わせ、俺を認識した。

「おはよう、お兄ちゃん……」

まだ少し眠そうに目をこすりながらそう言った。

「お、おう、おはよう」

だから俺はとりあえずそう返した。

「ふああああ……」

伏はあくびをしながら伸びをする。

ささやかさんがぼろり、と見えたり見えなかったりする。

眠そうな目でそれを直しながら、伏はベッドから立ち上がる。

「起きないの、お兄ちゃん？」

今度は逆に俺がそう聞かれた。

「お、おう、起きるけどさ……着替えをしてから下に降りていくか

ら、お前も着替えて来いよ」

「うん、じゃあね」

伏がやつと部屋を出て行った。

ふう……。

俺はほっとして、隠していた股間を放り出した。

……いや、これは朝立ちだ。

それ以外の何でもない。

昨日、我慢したからなあ。

俺はマイサンを暴れたままにさせながら、アンニユイにたたずんでいた。

「あ、お兄ちゃん！」

「はひっ！」

俺は腰を曲げてしゃがみこむ。

「……？ どうしたの？」

「何でもない！ 何でもないから！ 用事は何だ？」

俺は必死に股間を守りながら、そう答える。

「えっと、制服の下って何着るの？」

「俺は女子の制服脱がしたことないから知らんっ！」

「そっかあ、分かったよ、ありがとうお兄ちゃん」

何が分かったのか知らないが、伏は俺の答えに満足して出て行った。

俺はほっとして起き上がったが、いつまた伏が入ってくるかと思うと、しばらくは警戒したままだった。

ようやくマイサンが納まったところで、制服に着替え、下に降りた。

「おはよう、母さん」

「おはよう」

俺が座ると、焼かれたトーストとサラダが運ばれる。

俺はそれを食べ、テレビを見ていた。

「おはよう、お兄ちゃん！」

その後すぐに伏が降りてきて、俺に挨拶をする。

さっきまで一緒に寝てたのに挨拶もないもんだ。

いや、それを母さんに悟らせないためにあえて言ったのかもな。

伏の前にもすぐに朝食が運ばれてくる。

あれ？ こいつ今、母さんに挨拶したか？

「ねえ、お兄ちゃんの高校ってどんなところ？」

そんな疑問を考える間もなく、伏が質問をしてきた。

「ん？ いや、普通の高校だぞ？ 変な校則もない代わりに、大抵

の校則もあるって感じの」

「ふうん、普通かあ」

何が嬉しいのかわからないが、嬉しそうにそう言って、期待に満ちた表情でパンを頬張っていた。

「よし、急ぐぞ、さっさと食べるよ」

「うんっ！」

そう言いながら、大きく口を開け、パンを頬張った。

今朝はいつもより少しだけ早く家を出た。

授業が始まるギリギリに学校に着けばいい俺とは違い、伏は転入のための挨拶なんてものがあるからだ。

だから、登校中に会おう奴らもいつもとは違う。

「おはよう拓海くん」

横からの声に振り返ると、そこにはクラスの友達である真希がいた。

長い、手入れされたサラサラの髪が綺麗な同級生だ。

こいつは中学時代から何回かクラスメートになった事もあり、女子の中では一番仲がいい。

ぶっちゃけて言えばこの子は俺に惚れてると思ってるけど、俺はそれに気がつかないフリをしている。

この子は普段はおとなしくてスタイルもいいし、顔も可愛い子なんだが、ちよつとダークというかヤンでデレなところもあり、ちよつと面倒だな、と思うからだ。

まあ、悪い奴じゃない。

「おはよう、真希」

「今日は早いのね？」

「ああ、こいつ連れてるからな」

俺は隣にいた伏を指差す。

真希の顔がみるみるヤミの世界へと変わっていく。

「え？ やだ……拓海くんにそんな人がいたなんて……」

「妹だからさ、そのわら人形をさっさとしまってくれ」

俺は真希が手に持っていた人形と五寸釘を、真希の鞆に押し込んだ。

「妹……？」

真希はじつと伏を見る。

伏は物怖じもせず真希に笑いかける。

「……拓海くんと同じ光を持ってる」

「何だよ光って」

ここでオーラとかそついう事を言われたら怖いけど、まあ真希なら仕方がない。

真希はそれには答えずに伏に手を差し出す。

「よろしくね、えっと……」

「伏です」

「よろしく、伏ちゃん」

伏はその手を握り返し、握手が成立する。

「はいっ、よろしくお願いします、真希先輩！」

伏の輝かしい笑顔が、真希と俺を照らした。

あ、光ってこれか。

俺はこんなもん持ってないけどな。

そんなことがありながらも、三人で登校を続け、学校へと到着する。

「じゃ職員室はあっちだから」

「うん、分かった！ じゃ、また後で！」

元気にそう言うと、伏は職員室の方へと駆けて行った。

「元気な子ね……」

「まあな。あれでちょっと前まで病気だったって言うんだからな」

「羨ましい……」

伏の消えていった方向を眺めながら、真希がつぶやくように言う。

「いや、真希だって見た目は悪くないし、笑ってればあんなもんだろ？」

「……妬ましい」

「だからさ、もっと笑……妬！？ 何で？ どうして？ 俺の妹何か粗相でもしたか！？」

その問いに答えずに、真希は教室へと向かったので、俺も慌ててついて行った。

午前中は伏が気がかりで仕方がなかったが、まあ、授業に集中していないのはいつも通りなのであまり問題もなく昼休みを迎えた。

いつもの昼なら、俺や真希ら数人の友達で昼を食べるところだが、真希を含めて何人かが選択で調理実習だった。

何人かというか、ほぼ全員で、残ったのは俺と斉藤って女子だけ

だ。

男もみんな調理実習やってるからな。

で、その斉藤って奴は真希に悪いからというよく分からない理由で俺との昼食を辞退したので、俺は一人で食べる事になった。

斉藤の恐怖に引きつった笑顔が忘れられない。

真希は普段どんな事やってんだ。

どうせ一人なら普段したことのないことをしてやれ、などと思い、俺は校庭に出てベンチに腰かけてみた。

「ま、食べるのはいつもと同じでパンだな」

俺はそうつぶやきながら、整然とした行列で購入したパンの袋を開く。

「……拓海くんが、一人……」

背後から、いや頭上からそんな声が聞こえてきた。

「かわいそう……かわいそう……かわいそう……」

おそらく真希だが、何だかヤンであるので、放っておく事にした。ヤミモードに入っていると、色々厄介なのだ。

俺はパンを一口頬張る。

「あんな大量生産のパン……かわいそう……」

ほっとけよ、とつつこみ返しそうになるのをギリギリで止める。

「あ、お兄ちゃん！」

向こうから、手を真上に上げながら振って走ってくるのは伏だ。頭上の声とは違い、底抜けに明るい声だ。

「羨ましい……妬ましい……嫉ましい……」

声のヤミ度が深まって行っているが、気にしない。

おそらくこの後呪詛が聞こえてくるが、いちいち相手にはしていいられない。

カッ！

大きな音がしたので、隣を見ると、包丁が突き刺さっていた。

「おまつ！ 危ないだろ！」

これには思わず突っ込んでしまった。

「嬉しい……構ってくれた……」

校舎の三階の窓。

目が見えるか見えないかの頭部が見え隠れする。

あんなところから包丁落としたら危ないだろうが。

だが、いちいち上って怒りに行くほどでもないし、それはそれであいつを喜ばせるだけだ。

とりあえず包丁を抜いた。

後で返しに行こう。

「どうしたの、お兄ちゃん？」

やっとこっちに到着した伏が聞いてくるが、この状況をどう説明したらいいかな？

「いや、実はさ、真希が三階からこの包丁を」

俺が包丁を伏に見せようと、前に出した瞬間の事だ。

「あっ！」

伏が何かにつまづいて転ぶ。

俺はそれに気づき、抱き止めようと、手を出す。

その手に包丁が握られている事を忘れて。

ざくり。

「あ……」

嫌な、感触がした。

「ふ……し……」

伏の鳩尾の下辺り。

そこに、包丁は深々と刺さっていた。

柄を持つているはずの俺の手が、伏の腹に接触するくらい、刃のすべてが伏の体内に飲み込まれ、伏の細い体躯を貫こうとしていた。

俺は状況を飲み込めずにいた。

いや、飲み込みたくない、理解したくないという心の抵抗が、理解を遅らせていた。

顔に降りかかってくるのは、俺の妹の髪と、シャンプールの香り。力なく俺にしなだれかかって来るのは、俺の妹の身体。状況は変えられない。

伏の温もりが伝わって来るほど、その現実を受け入れざるを得なかった。

俺は、伏を包丁で刺した。

出来たばかりの妹を殺してしまった。

頭が真っ白になる。

手の震えは止まらない。

悲しいとか、怖いとか、そんな感情とは違う、人を殺したという受け入れられない重みをただただ感じていた。

息苦しくなってきた事で、やっと自分が息を止めている事を理解し、大きく息を吐いた時。

「いったあああ！」

伏の明るい声が聞こえた。

「……へ？」

なんだ？ 何が起こったんだ？

「痛いよもう！ お兄ちゃんってば！」

伏はもぞもぞと立ち上がり、刺さっていた包丁を、ぼん、と引き抜く。

「ええっ!？」

包丁をベンチに置くと、くるん、と俺を振り返る。

「お兄ちゃんはいつも一人でご飯食べてるの？」

何事もなかったかのように、聞いてきた。

「いやいやいやいや！」

この数秒のあまりの非現実的な光景に、俺が混乱していなかったと言えは嘘になる。

「え？ きゃあっ!！」

「嘘つけっ！ 本当は何なんだよ！ 何で俺んちにいるんだよ」
こいつは妹じゃない。人間ですらない。

そんな恐怖が俺を支配する。

冷静であったとは言えないだろう。

あんなもんを見せられて冷静でいられるわけもない。

「……………それでも」

伏は少し悲しげに微笑み、だが強い強調を込めて言う。

「私は、お兄ちゃんの妹だよ？」

「……………！」

その、あまりに強い、言い換えれば必死の表情に、俺は次の言葉を口には出来なかった。

こいつにも色々事情があるだろう。

それも考えずに化け物扱いしたのは確かに悪かったかもしれない。

だが、それで何が変わるわけじゃない。

化け物であろうがなかるうが、こいつが刺しても死なないのは事実だし、俺の家で俺の妹を名乗って住んでいるのも事実だ。

「怒ったりしたのは悪かった。だが、本当のところを教えてください。

お前が俺の妹かどうかもそれで決める」

俺はなるべく冷静な態度で、伏に向き合って、そう言った。

「……………分かった、ちゃんと言うよ」

伏が少し寂しげにそう言った。

「でも、ここじゃ言えないんだ。家に帰ってから、お父さんと一緒に言うから」

そう言って最後に寂しげに笑いながら走り去って行った。

俺はただ、去っていく姿を見つめるだけだった。

第三節

幕間 研究者の陰謀

「店主を呼べ！」

「な、何よ急に」

驚いて箸を落としそうになる結衣。

「今は鮎の季節にあらず！　これが季節の魚とは片腹痛い！」

「別にいいじゃないのよ。この季節だって鮎は獲れるでしょ？」

「所長は分かっています！　季節の魚とは、その魚が一番おいしい時期のもですよ」

「あんたがそんなに季節の魚にこだわりがあるとは初耳だわ」

「奇遇ですね、僕もです」

平然と言い返す樋田。

「今後フィッシュアンドチップス以外の魚は食べるな！」

怒りに任せて立ち上がる結衣。

「それは我々英国国民への侮辱ですか？」

「ち、違つわよ。祖国を馬鹿にしてごめんな……って、あんた生粋の日本人じゃないの！」

「私の祖母の友人が英国人なのです」

「へえ、そういう関係……って、やっぱり生粋の日本人じゃないの！」

結衣が勢いを削がれて座る。

「もう、樋田はああ言えばこう言うっ！」

「科学者とはそういうものです」

市街地のホテルにある料亭の一室に、似つかわしくない二人の客。結衣と樋田は、そこで昼食を食べながら、一休みしていた。

今日は朝から市役所や郷土資料館や図書館などを廻り、不老不死に関する情報を探して回った。

「しかし、こうも資料が乏しいところも珍しいですね。少なくとも噂になれば、それなりの記述が残っていても良さそうなものを」

「それは逆に真実に近いって事じゃないのかって思うのよ」

「まあ、言いたいことは分かります。権力者は真実こそ隠したがりますからね」

「そうよ！ ここに残る史実としては、昔この地に風楼神社という神社があつて、そこに不老不死の生き神を奉つていた。でも、それが不老不死だと周りに広がって、幕府や大陸からもそれを欲しがる輩が現れて、風楼神社は何者かに壊滅させられた、という事」

結衣が鮎の小骨を取りながら話す。

「でもね、いくら風楼家が壊滅したとしても、その神が不老不死なら生き残つてははずよね？ それがそこで史実から消えている。幕府とか大陸にさらわれたという可能性も、もちろんあるんだけど。だとしたら、これだけ情報がないのは怪しいのよね。地域の生き神がいる神社が潰され、生き神が行方不明。これって歴史的な大事件だと思うわ。なのにほとんどその形跡が残ってない」

「ふむ。それが出来るのは、領主、もしくは幕府ですか」

「幕府がいくらそれを強制したところで、藩主がそれに乗り気でないなら書物の一冊二冊、隠しておくことくらい出来たはずよ。幕府が領主に圧力をかけられるなら、そもそも最初から領主に引き渡せと命じればいいだけで、神社を壊滅させるなんて強攻策を取る必要がないわ」

鮎の小骨が取れないまま、諦めて話に熱中したふりをする結衣。

「領主が、その事実を強制的に消した理由は色々考えられるわね。生き神という嘘で人心を支配してきたので、殺戮されたのがばれるのを隠したか、もしくは、生き神を外敵から保護するために、存在する事実自体を消し去ろうとしたか」

「ふむ。つまり、領主が意図して隠したと。所長は歴史学者にでもなつたらどうですか」

「歴史に興味があるわけじゃないわよ。ていうか、ここに来て茶化

すなっ！」

樋田は綺麗に骨だけ残した鮎をつつきながらいつものように平然と結衣を見返す。

「で、所長は生き神がいたと踏んだのですか。おそらく、市役所辺りで、でしょうかね？」

「そうよ、あの市役所の職員の状態。あからさまに怪しかったのよね。私たちは不老不死の人間を探してる、なんて馬鹿正直に言わずに、各地の不老不死伝説を研究しているって言っただけなのに、何故だかそんなものはありません、の一点張り。歴史的に少ないけど資料があるのに。普通なら資料館を紹介するとかその程度はしそうなものでしょ？」

「くそ生意気そうながきにわけの分からない事を聞かれたからイラストと来たんじゃないですか？」

「誰の事よ！」

「誰の事だと思えますか？」

「……樋田」

「惜しい」

「どうでもいいわよそんな事。それよりも」

「正解は所長でした」

「だから、言わなくてもいいわよ！」

ばんばん、と結衣が机を叩く。

その手の先で鮎の乗った皿に手が当たってしまい、結衣の食べかけの鮎がふわり、と宙を舞う。

「あっ、あっ！」

慌てる結衣をよそに、樋田が自分の箸でその鮎を受け止め、そのまま結衣の口に突っ込む。

「むぐっ！ むぐぐううっ！」

魚をくわえた状態の結衣は、抗議しようにも、口が開けない。

「ま、所長がそう言うのでしたらもう少し調査しましょうか。神社についてならもう少し資料もありそうですし」

「むぐ」

下ろせばいいものを口にくわえたままの状態の結衣。

「ところで、所長は不老不死の人を見つけてどうするつもりなのですか？」

「むぐ？」

「いえ、だから万一所長の滑稽な妄想が現実だったとして」

「むぐむぐう！」

何か怒っている結衣だが、いつも以上に樋田には通用しない。

「その人をどうするつもりなのですか？」

「むぐ」

「むぐでは分かりません。もっと人間らしい事言ってください」

「むぐう！」

結衣は唇を動かして鮎を口の中に押し込んでいく。

そして、そのまま鮎をバリバリと尾頭骨付きで食べ始めた。

「あなたは猫ですか」

「だから、見つけたら、当然」

「そんなことより、これから語尾にやんとつけてください」

「にゃん？ だから、見つけたら当然研究するにゃん！」

案外素直な結衣が、語尾にやんとつける。

「研究と言っても、不老不死なら生きている対象ですよ？ どのようになら研究するのですか？」

「私たちの得意分野から行けばまずは細胞を採集して普通の人間との差異を研究するにゃん。あと、アポトーシスの観点から、細胞の入れ替わりのパターンを見てみるにゃん」

「そんなに簡単に協力してくれませんか？」

「協力させるのにゃん！ どんな手を使っても……にゃん」

結衣は悪そうに笑うが、その口調に幼くて可愛い顔の彼女は、どう見ても悪役面は出来ていなかった。

「最後のにゃんは後でとってつけましたね」

「ちょ、ちょっと忘れただけになん……って、どうして私になん

とかつけないきゃならないのよ!」

「自分でノリノリで付けはじめたんじゃないですか」

「……そうだったっけ?」

「全く、自分で言い出したことで怒るなんて」

「ごめんなさい……あれ? 何か違う気がする?」

結衣が首を四十五度に傾ける。

彼女のツインテールがアンバランスに垂れ下がる。

「そんな事どうでもいいじゃないですか。それよりも不老不死の方が大切でしょう?」

「うん、そうだけど」

結衣は納得いかなそうな表情をするが、樋田はそれに構わない。

「じゃ、そろそろ行きますか。食べ終わった事ですし」

樋田がゆっくりと立ち上がる。

「待つて! デザートがまだ来てないわよ! 今日のデザートは季節のスイーツなのよ!」

「そんなものに興味はありません。行きましょう」

樋田は結衣の手を引く。

「行かない! やだっ!」

結衣が座り込む。

「駄々をこねないでください。面倒です」

樋田は結衣を抱えてでも運ぼうとした。

「いいいいいやあああああっ!」

結衣は全身で暴れて抵抗する。

「デザート食べなかつたら、午後ずっと駄々をこね続けるわよ!」

「厄介にも程があります。何のためにここにいてるんですか」

「樋田が季節の魚を食べたいと言ったから! 樋田だけずるい!」
所長の威厳どころか、十七歳としてどうかというレベルで言い返す結衣。

樋田は深いため息をつく。

「まあ、分かりましたよ。食べたらもう駄々をこねませんね？ 今日一日くらい」

「うん！」

結衣は嬉しそうに答える。

樋田はやれやれと席に戻った。

「まさか、こんなにも早くばれるとはなあ……」

親父が苦笑する。

俺はその顔にイライラしていた。

急いでいるときほど時間の経つのは遅く、午後の授業はとても長く感じたがそれでもやっとなつと終わりが来た。

俺は友達のを誘いを無視して、ダッシュで家まで帰ってきた。

そして、カバンもそのままに親父のいる居間のドアを開けたのだ。そこには何故か既に伏がいた。

着替えまで済ませてるって事は一限早く終わったのだろう。

で、事情を全て伏から聞いたであろう親父が、俺が何かを聞く前にそう言ったのだ。

俺がイライラするのも分かるだろう。

「で、あんたも知ってるなら話せよ。伏は何者なんだ？」

「お前の妹だ。戸籍もある」

親父が真顔のままそう言ったので、俺のイライラは頂点に達した。「ふざけんなよ。包丁で刺しても死なないような血が俺にも入ってるって言うのかよ？」

「いや、入ってないな」

冷静に答える親父に腹が立つが、ここで暴れると何も聞けないのでこらえる。

「だから、何者なんだよ、伏は！」

びくん、と伏が驚く。

こいつには悪いとは思うが、俺の経験上、親父はこうまで言わないと駄目だ。

「分かった。答えようか。だが、まず最初に約束してくれ。この話は、絶対に誰にも言わないでくれ。これは私やお前だけの話ではないのだ」

親父のあまりに真剣な表情。

「……分かった」

俺はそれに飲まれつつも、そう答えた。

事実が分かればそれでいいし、元々隠し事を人に喋る趣味もない。「言わなかったのは悪かったな。最初に言ってもどうせ信じてもらえないと思ったからだが」

「そうか。まあ、それはいいや」

どんな秘密かは分からないが、確かに伏は刺されても死なないんだ、とか言われてもまず信じなかっただろう。

親父は立ち上がり、伏の肩を叩く。

「この子はな、不老不死なんだ」

親父は少し微笑んで、伏は少しうつむいて、俺の反応をうかがう。だから、俺はすぐには何の反応も出来なかった。

「そうかよ」

そう、ほぼ無表情で言ったただけだ。

まあ、ある程度は予想できた事だ。

もちろん、刺した一件がなかったら信じすらしなかったが。

「こつ見えて既に何千年も生きている。死ぬ事はないし、死ぬ事は出来ない」

伏はじつと俺の様子をうかがっている。

俺は驚くことすらためらった。

「生き神様と言われていた頃もあるが、今ではその信仰はない。だが、我々風楼家は、代々この子を世話し、世間から隠すという使命を仰せつかっているんだ」

不老不死の生き神様。

それを代々守っているのが風楼家。

「ってことは、俺も守るって事なのかよ？」

「彼女はほとんどの時を屋敷にこもって暮らして来ていたんだ。それは風楼家が自らの使命を果たすにはとても都合がいい手段だと思ふんだが、よく言っても幽閉なんだ。私もそれを知りつつ彼女を隠していたんだが、可哀想に思えてな。十五年前、戸籍を提出してこの日を待ったんだ」

静かに、穏やかに、親父が言う。

「……つまり、戸籍も十五年前にダミーで出して、それが通用する歳になったから出てきたって事だな？」

「いやまあ、それはそうなんだが、それだけじゃ、いくらなんでも小中行ってない時点でおかしいと思われるだろ？ その辺は市とうまくやっている。と言うか、今は市が我々にこの使命を与えているんだぞ。昔は領主だったらしいがな」

「なんだかよく分からんが、つまり市も結託してるんだな？」

「ああ、この事実は市役所でも一部の者しか知らないがな。補助金も出てるんだぞ」

何の名目で出てるんだろうな、それ。

「ああ、だからあんたニートでも生活出来てるのか」

俺の長年の疑問が解けた。

俺が生まれたときから親父はニートだし、母さんは専業主婦だった。

それが普通だったので何の疑問にも思わなかったが、学校に行つて友達と話をする、それがおかしいという事には気づいていた。

「うちはどこから収入を得ているのか？」と。

だが、親父も母さんもはぐらかせて教えてくれなかった。

大方、遺産か何かあつてそれで生活しているんだなと思つていたんだがそうじゃなかったようだ。

「そつだ。だからお前も頑張つて就職しなくてもいいんだぞ？」

「いや、俺は働く気だがな」

「何故だ？ 一緒にノンタックスペイヤーになろうじゃないか！」

「何だそれ」

「所得税を払わない消費者」

「なるかつ！ 納税者に謝れ！」

親父がいつもの調子になったので、俺もいつものように怒鳴った。その間で、伏が心細そうに俺たちを見上げていた。

「あー、悪いな伏。俺たちは深刻さの足りない家系だからさ、なんかもう、それでいいや」

「それでいいって……？」

恐る恐る、といった表情で伏が聞く。

「まあ、お前は俺の妹だし、俺の家族だ。お前を守るのが使命なら守ってやる。それでいいんだろ？」

深刻さとか真剣さのかけらもない。

降って湧いた信じられない話。

一族の使命だとか、俺の役割だとか、そんなものを聞かされたわけだけどさ。

重い話に重い使命なんだろうけど、それを受け入れることに身構える必要なんてない。

「本当に？」

「ああ、本当だ。これからも俺をお兄ちゃんと呼べ」

「お兄ちゃん！」

伏は嬉しそうに俺に飛びついた。

柔らかい感触と女の子の匂い。

「はははははははは」

妹と決めた、でも妹じゃない女の子の抱きつきに、俺はただ乾いた笑いしか出なかった。

長かった一日がやっと終わり、寝る時間が来た。

今日は色々あったな、などと思いつき出すまでもなく、色々な出来事が思い返される。

まあ、一言でまとめれば、俺の妹は不老不死で、俺が妹を守っていくって事でいいのかな。

あの後親父に致命されたのは、死なないからといって、わざと伏を傷つけたり、殺そうとしたりするなって事だ。

死なないといっても痛みはあるから、死なない分、治るまで激痛と戦わなければならぬ。

まあ、それは確かに分かる。

刺されたら痛いだろうし、実際今日も刺されてしばらくは痛みで声も出せなかったしな。

それにどこで誰が見ている、ばれないとも限らない。

昨日今日じゃない、何百年何千年守り通してきた秘密を、俺の代でばらすわけには行かない。

軽いノリで受けた事だが、そこだけはしっかり守ろうと思う。

そう思いつつ、俺はベッドに入り、電気を消す。

明日も伏と学校へ行くんだな、なんて思うと、少しだけ嬉しかった。

「お兄ちゃん？ もう寝た？」

「かちやり、とドアが開き、その向こうから小さな声で伏が俺を呼ぶ。」

「起きてるけどさ、また一緒に寝」

俺が言い終わる前に、伏は俺のベッドに潜り込んで来た。

「えへへ、来ちゃった」

風呂上りの伏はシャンプーとか石鹸の香りが漂う。

「来ちゃった、じゃない！ 帰れ、今日からはもう帰れ！」

こいつは俺とは血のつながっていない女の子だ。

妹だけど、そういう関係になることに止め処はない。

そんな女の子と、一緒に寝るって事は、どこにも歯止めのかげようがない。

「どうして？ 妹なのに？」

「普通の兄妹は高校生にもなって一緒に寝ない！」

「別に普通じゃなくていいよ？」

「レッツ普通！」

俺は伏を追い出そうとするが、また変なところを触らないように、頭を押し出そうと思うが、伏はくるんと首を回し迫ってくる。

肩や手ならいいんだろうけど、触ろうとして変なところに触る可能性があるため、慎重に掴むしかない。

ああっ、こいつは何でこんなにいい匂いするんだよ！

誘惑に負けそうじゃないか！

「えへへ〜。お兄ちゃんのマウントポジション取った！」

気がつく俺は、伏に馬乗りになされていた。

尻とか股間とかが俺の腹に密着して大変な状態ですよ？

「ノーモア普通！」

そう言いながら、伏はそのまま倒れこみ、俺にしがみ付く。

「ぶるあああああっ！」

伏の足から太ももから股間から腹から胸から腕から頬までが俺の身体に密着する。

シャンプーの香りだけじゃない、少し動いたからか、伏の汗の匂いまでする。

伏の柔らかい全身と、この匂い。

冷静でいられる青少年がいたらお目にかかりたい。

「あ、おつきくなってる！」

伏が俺の股間を遠慮なくむんず、とばかりにつかむ。

「フオオオオオオオッ！」

俺は思わず悲鳴を上げる。

「いやっ、これはその、そういうもんなんだよ！」

血がつながってないとはいえ、妹と決めた女の子相手に股間が元気になった俺は深い自己嫌悪と自己主張の狭間にいた。

「いいんだよ、これが目的なんだから」

伏がにこり、と笑いながら言う。

「目的って、何だよ？」

俺の股間を握る事とか、俺のマイサンを元気にさせることが目的なわけでもないあろう。

「あのね、私は長い間生きてきて、風楼家の人たちに先祖代々守ってもらって来たの。それは嬉しいことだし、本当にありがたいと思っ
っているんだ」

伏は、最上級の笑顔を俺に向ける。

俺の股間を握ったままで。

「でもね、そうやって仲良くなった人も、みんな死んじやうんだ。仕方がないことだけど、寿命ってものがあって、その時が来ればみんな死んじやうの」

今度は一転して、悲しそうな寂しそうな表情になる。

俺の股間は、まだ握ったままで。

「それでね、いい事を思いついたの。風楼家の男の子と一緒になっ
て、私が風楼家の赤ちゃんを産むの。それでね、その子に守っても
らうの。その子が死んでも私の孫が、孫が死んでもひ孫が、私を守
つてくれるの！」

伏は凄い名案とばかりに熱く語る。

「素敵だと思わない？ 私は私の子孫をずっと見続けていられるの
よ！」

興奮で股間を握る手が強弱するのが気が気でならないが、伏の言
いたい事は分かった。

だが、いきなりそんな事を言われても困る。

いや、伏は可愛い子だし、付き合ったり結婚したりする事に問題
があるかといえば、まあ、ない。

だが、いきなりここで今から子供を作りたいと言われれば、そり
やあドン引きものだよな。

「いや、伏、物事には順序ってものがあってだな」

「上の口ではそんなこと言っても、下の……えっと、鼻は正直だ
よ？ いやらしいお兄ちゃん」

伏は、元気過ぎるマイサンを、親指でいじくる。

「こんな状況でこうならない方がおかしいんだよ！ 男ってそんな動物なんだよ！」

「いいよ、お兄ちゃんだから許してあ、げ、る」

伏がもう一方の手で、俺の鼻をつつく。

「その代わり頂戴ね」

「……何をだよ」

「こ、だ、ね」

「ノオオオオオツ！」

「動かないで！ 動く潰すわよ！」

伏が股間を強めに握る。

俺は全ての動きを止めた。

それを潰されると、俺はもう生きていけない。

少なくとも男として死んでしまう。

「やめる、伏！」

「やめる？ あれ？ お兄ちゃん、自分の立場分かってるのかなあ？」

「？」

「やめてくださいっ！」

俺は恥も外聞もなく言われたとおりに従った。

「何で親父の代にしなかつたんだよ」

伏が不老不死なら当然親父の若い頃にも出会っているわけで。

その時にやってくれていたら、俺も半分くらい不老の血が入った

かもしれない。

「勝徳さんにもね、やったんだよ？ でも、あの人ガードが超固く

て。しかもいきなり結婚するし！」

ああ、結婚したら手を出さないのか。

そういう律儀さというか真面目さはあるんだな。

「……あの、泥棒猫」

さっきまでとは全く違う声で、伏は物騒に呟いた。

「その猫って俺の母さんの事か！？ 母さんは優しいからそっとし

ておいてやってくれ……ください！」

「ふーん、そう言えばあんたにもあの女の血が流れてたわよねえ」
俺の目を睨みつけながら、股間をにぎにぎと揉みはじめの伏。
さっきまでとは雰囲気も変わってる。

やばい、俺、狩られる。

「ま、過去の話はいつか。お義母さんだしね」

いや、確かに伏は俺の義妹で、母さんは義母だけど！

「勝徳さんに振られて十数年。私はお兄ちゃんから子種をもらった
め、あらゆる作戦を立てたのよ。もう、作戦は遂行中よっ！」
にやり、と笑う伏。

「いや、よく考えたら、潰したら一番困るのは伏じゃないか？」

俺も困るけどさ、何より俺の子種が欲しい伏も困るだろ？

「それなら仕方がないから、お兄ちゃんの子供にアタックするまで
の話だよ！」

「いや、潰されたら子供作れないし」

「……っ！」

伏はそれに初めて気づいたようで、驚いた顔をしていた。

「よ、養子を取ればいいじゃない！」

「俺の股間潰す奴のために、誰がそこまでするか！」

「くっっ！ でも！ 潰すからっ！ 動いたら潰す！」
開き直った。

これじゃあ俺も動きようがない。

「とにかく、落ち着こう、な？ 冷静になって考えてみよう。大人
になってからでもいいんじゃないのか？」

俺はとりあえずこの場を逃れるために伏の説得をする。

このまま妹に無理やり犯される初めてって十字架を一生背負わな
ければならないのは嫌だ。

「私は成長しないもん。それに、お兄ちゃんだけ成長したら、私の
事、子ども扱いするようになるもん！」

「いや、なんで中途半端な年齢で止まってるんだよ。せめて精神だ
けでも成長しろよ」

「昔はこの歳が結婚適齢期だったの！」

うん、見た目については分かったけど、精神的にはもっとう、千年生きた威厳みたいなのを見せてくれないと！」

「さあ、そろそろ観念して。天井の模様数えてる間に終わるから嫌だ！ そんな女の子みたいな初体験嫌だああああっ！」

抵抗しようにも、人質に取られたマイサンがいるので動けない。

「ふふふ、諦めておとなしくなっつてね、お兄ちゃん」

「くっ……」

もう、駄目なのか。

このままやられてしまうのか？

この歳でお父さんは辛い。

永遠に可愛い嫁と暮らすのは悪くないけど、俺もまだ色々したいことがある。

「ちよつと待ってね……あれ？ んしょ……」

俺がほぼ観念していると、伏が何だかもぞもぞしている。

その度に俺の股間もぞもぞとなり、なんていうか、変な気分になるだけだ。

伏を見ると、どうもパンツを下ろすのに一苦労しているようだ。

片手、しかも利き手で俺の股間を掴んでるから、もう一方の手一本で下ろす事になる。

膝までは簡単だが、そこからが難しい。

立ち上がるなら、俺の股間から手を離さなければならぬ。

伏はあっちに行ったりこっちに行ったりしつつ、一生懸命脱ごうとする。

俺は、伏の白い尻があっちに振られたりこっちに振られたりするのをただ、見ているしかなかった。

見ているしかない、というのはあくまで俺の話で、俺のマイサンはその様子を見て大暴れしていたわけで。

伏の尻は、身体全体の線が細いので決して安産型ではないが、形が綺麗で、見ているだけでかぶりつきたくなるようないい尻だ。

そんなもんが目の前で動いているんだから、無感動無関心でいられるほど達観した聖人にはなれない。

完全体になったマイサンは伏の手を押しどけるため、伏はマイサンのみを握っていた。

これで少なくともギョクを潰される心配はなくなった。

今のマイサンなら、多少の攻撃には耐えうるだろう。何故なら、完全体だからだ。

「よし、脱げたっ！　じゃあ行くわよ、お兄ちゃ……きゃああっ！？」

一瞬の隙を突いて俺は、伏の腕を引つ張り、倒した上に乗り、伏の肩をベッドに押し付けた。

それでも伏はマイサンから手を離さなかったが、俺が振り解く要領で股間をひねったら、あえなく手を離れた。

「な、なによお兄ちゃん。私と一つになるのがそんなに嫌なの！？」悔しさに泣きそうな表情で伏が訴える。

ああ、これが敗者の表情か。

俺は余裕を持って組み敷いた伏を、上から眺めていた。

「まだ、やりたいことがあるんでな
俺が格好つけてそう言った。

「やりたいことってどうせ女遊びでしょうが！　そんなものしなくたって私がずっと相手してあげるから！」

格好つけた俺の言葉に泥を擦り付ける伏。

女遊びって言われると、間違っちゃいけないけど、ちょっと違う気もしないでもない。

「いや、それだけじゃないからさ。もっとこう、恋愛とか結婚とか家庭を持ったりとか、そういう事を普通にしたいんだよ」

「結局女遊びでしょうが！　そんなの全部私がさせてあげるわよ！
いや、何ていうか、そうじゃないって言うか、そうなんだけどさ！

出会いとかわくわくとか、そういう希望みたいなものが欲しいんだよ。

「別に伏が嫌ってわけじゃない。俺はさ、もう少し希望みたいなものが欲しいんだよ」

「希望が欲しいなら私がいくらでもあげる！ 希望でも恋でも肉体でも何でもあげる！ だから私にしてっ！」

伏が俺の下でばたばたともがく。

駄目だ、このままじゃ埒があかない。

「おい、うるさいぞ、もう少し静かに」

いきなり俺の部屋に入って来たのは親父だが、俺たちの様子に言葉を止める。

俺は自分の格好をふと思り返す。

俺はマイサンを極限まで大きくさせて、伏を組み敷いている。

下半身裸の伏が、俺の下でもがいている。

「あー……」

「いやっ！ 違うから！ 俺が襲ってんじゃなくて、俺が」

俺が慌てて親父に弁解をしようとして、肩を上げてしまった。

解放された伏は、俺から逃げ。

「お兄ちゃんの馬鹿ああっ！」

俺の股間を思いつき叩いて叫ぶ。

「ぎゃあああああっ！」

その地獄の苦しみに俺がもがき苦しんでいると、親父が一言言った。

「……邪魔したかな？」

「邪魔じゃねえっ！ むしろベストタイミングだったけどっ！ そ

れはそうと息子が息子を殴られた姿をこれ以上見ないでっ！」

「ああ、じゃ、また明日」

「あ、伏連れ帰ってくれ！」

俺が転げまわっている間に、また二人きりにされたら、今度こそもう終わりだ。

「伏なら部屋に帰ったよ。今日はもう来ないんじゃないかな？」

ようやく痛みが徐々に引いてきたので、周囲を見回すと、確かに

伏はいなかった。

俺はほっとしてベッドに寝転がる。

こんな攻防がこれからずっとあるのかと思うと恐ろしい。早いところ諦めて軍門に下った方がいいのかも知れない。

それで何か失うものがあるのか？

可愛い妹が彼女になり、甘く退廃的な生活が約束されている。

俺は何を恐れている？

何を失うと思っている？

ああ、そうだ。

男の、プライドだ。

女の子に無理矢理初めてを奪われるという事態に抵抗したいだけなのだ。

だったら、自分から襲えばいいか？

いや、そんな簡単な問題じゃない。

これはもつと根が深い問題だ。

いや、そんなこともないかも知れないが、もつとこつ、複雑なのだ。

俺は絶対、伏に貞操を奪われない。

そう誓って眠りに着いた。

ちなみにマイサンはまだ起きていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3213ba/>

妹はふろうふし

2012年1月8日11時52分発行